尋常小學

國民修身篇

貳

検定申請本

K120.1
46
3

K120.1
46
3

露光量調整、重複撮影

井上哲次郎校閲
赤沼金三郎編纂

尋常小學國民修身篇

版權所有

尋常小學國民修身篇卷二

井上哲次郎　校閲
赤沼金三郎　編纂

第一課　正直

人は、正直なる心を以て、よろづの事を行ふべし。正直は、成就の證人なり。

露光量調整、重複撮影

井上哲次郎校閲
赤沼金三郎編纂

尋常小學國民修身篇

版權所有

尋常小學國民修身篇卷二

井上哲次郎　校閲
赤沼金三郎　編纂

第一課　正直

人は、正直なる心を以て、よろづの事を行ふべし。

正直は、成就の證人なり。

正直ならざる人は、たとひ才能ありといへども、身を立つることあたはざるものなり。

たゞ正直の一徳をだに、よくまもりなば、たとひ才みゞかしといへども、人に信ぜられて、何事もうちまかせらるゝものなり。

正直なる人は、わが心にはづることなき故に、如何なる人の前にいづるとも、おそるゝことなきものなり。

第二課

森蘭丸の正直なりし話

森蘭丸は、幼きときより、織田信長に仕へ、正直にして、才能

のはまれあーりき。

あるとき、信長、刀を持たせーおかれしに、さやのきざーみめを數へー居たり。

信長、ひそかにこれを見て、その後、かたへの人を集め、きざーみ鞘の數を言ひあてなんものに、この刀をあたふべき由、いはれければ、みなおしはかりていひけるに、蘭丸は、ひとりだーまりゐたり。

信長、これをとひけるに、蘭丸

は、さきに、數へて覺へ居れりとて、いはざりければ、信長、ふかくその正直を賞して、其刀を蘭丸にあたへられけり。

第三課　禮儀

人の、萬物にすぐれたるところは、禮儀の道をたつるにあり。もし人とうまれて、禮儀なくば、かたちは、人間なれども、心は、禽獸とひとしかるべし。

禮儀をおこなふはじめは、まづ衣服をつゝしみ、ことばづかひをしくすべし。

君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の

まゝはり、それ〴〵禮儀にかゝふやうにするは、すゝはち、人の人たる道にて、禽獸にかはりたるところなり。

第四課

松平信綱の衣裳をつゝしみし話

松平信綱は、つねに衣裳に氣をつけ、出仕のときは、ことに、みだりなる衣裳を着ず、つねにいひけるやう、「人の心は、衣裳によりてかはるものなり。先づ衣裳より氣をつけて、恭敬をまもらずば。忠勤をもつくしがたきものなり」。

といはれけりとぞ。

第五課

堪忍

人と交るには、堪忍を第一とす。堪忍なければ、一日も、世に立つことあたはず。ゆゑに、「堪忍は、無事長久の基。」といへり。兄弟のあひだ堪忍なければ、その仲たがひしたしみ必ずはなれ、朋友の

あひだ堪忍なければ、その仲たがひはり必ずやぶるゝものなり。人より悪口せらるゝとも、これにこたふべからず。悪口にこたふるときは、たがひにいかりをまし、かまはざれば、おのづからきゆるものなり。悪口にかまはざれば、悪人たより

を失ふものなり。たとへば、天にむかひてつばきすれば、ついへりて、わが身へ落つるが如し。

すべて、心をば、大空の、物にさはらぬやうにもち、人の過をゆるして、みだりに、人をせめいかることなかれ。

何事も、心にひろくそさめぬれば、一切のもの、心にさはることなし。心のうちせまきゆゑ、心に物のさはるなり。

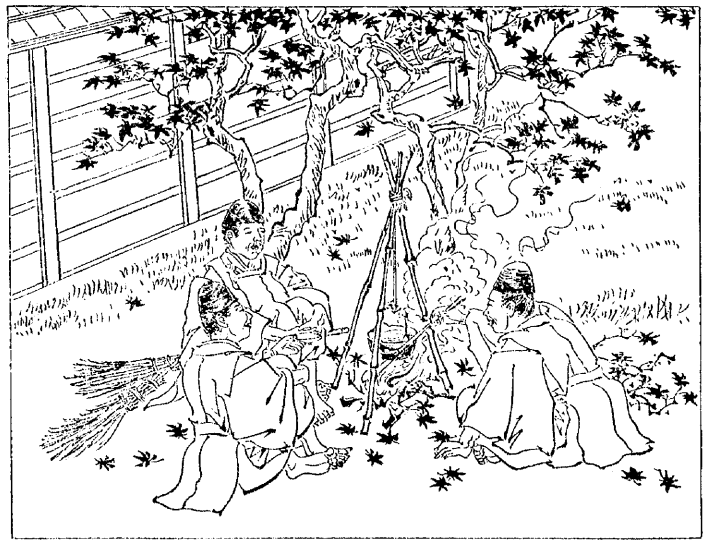
第六課

高倉天皇の寛仁

高倉天皇は、うまれつき至孝にして、いつくしみふかきみかどなりき。

御とし十歳のころ、御庭のもみぢを愛したまひ、侍臣におはせて、大切に守らせたまひけり。

さる程に、仕丁



等この由をしらず、ある日、この枝を折りて、酒を煖めけり。

侍臣は、これをみて、いかなる罰をうけんかと、大におそれて、つぶさにその由を奏しけるに、天皇、少しも怒りたまふ色なく、しづかに

林間煖酒燒紅葉

といふ句を吟したまひ、少しもとがめたまはざりけり。

高倉天皇の、かく堪忍したまふを思へば、われ〳〵臣民たるものは、たがひに堪忍して、みだりにいかるましきことならずや。

第七課　謹慎

よろづのとがは、口よりおこるもの多し。ゆゑに、「口は、禍の門」といへり。

人のあしきことそばいふべからず。このみて人の過をかたり、人のまねなどして、あざけりわらふ人は、心の慎みあさき人にて、人に

いやしめらるゝものなり。

誰もみきくまゝと思ふことも、人のみきくことあるものなり。されば、人の耳は、かべにつき、人の目は、いたにありとおもひ、深くつゝしむべし。

第八課　劉器之の言を慎みし事

劉器之は、行儀正しき人なり。一日、司馬温公にまみへて、一生の間行ふべき道をたつねければ、温公、「誠といふものこそそれなるべき。」とこたへけり。

器之、さらに「誠を行ふには、何より先に行へば、その誠

に至るぞ。」とひければ、「みたりなることばをいはざるよりはしめよ。」とこたへけり。

器之、安なる語をいはざるは、いとやすきことなりとかくごとして、つとめけるが、やゝもすれば、言と行と相違して、いひいだしたるごとく行はざることのみ多く、七年の後、はじめて言と行と、一致になりけるとぞ。

第九課　勉強

人は、光陰の得がたくうしなひやすきことを思ひて、學業を勉強すべし。光陰は、財寶の父

にして、勉強は、幸福の母なり。

幼きとき、學問を勉めざれば、よはひかたむきぬる後、たまくくいたりとも、およびがたきものなり。

身を立て家をそさむる人は、いとけなきときより、學業をつとめて、心のたまを

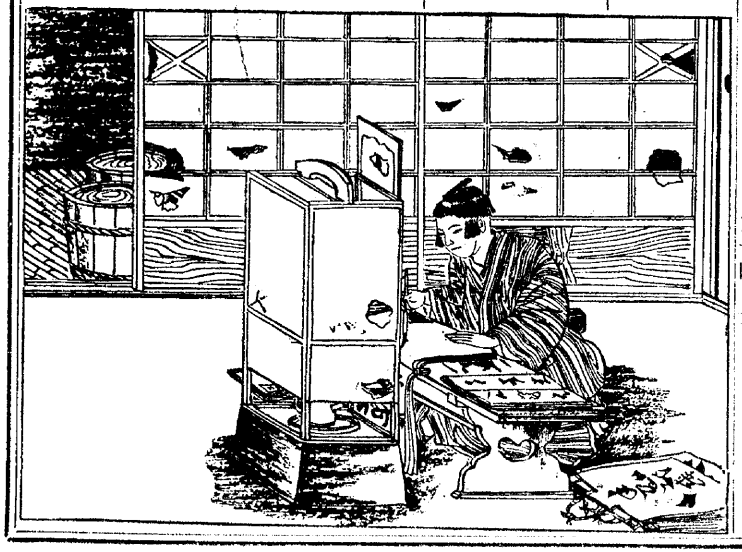
みがくべし。いたづらにあそびて、むなしく光陰をおくることなかれ。

第十課

新井白石の勉強せし話

新井白石は、九歳のころより、みづから課業をさだめて、晝、三千字、夜、一千字づゝ習ふこと

となし、ねむけを もよはし 堪へがたき ときは、冷水を あびて、ねむけを さまし、定めたる 課業を 全く をはりたる 後、



こゝろよく ねむりに つけり といふ。

白石は、かく つとめて 怠らざりしかば、遂に、名高き 大學者 となりけり。

第十一課　勤儉

家を 保つの 道は、勤と 儉

とにあり。勤なれば、よく財を得、儉なれば、よく財を失はず、二つならびて、一つをかくべからず。

勤儉の工夫は、勞苦にたへて、よく家業を勤め、質素を旨として、儉約を行ふにあり。

有用の品は、一本の筆、一枚の紙たりとも、大切になすべし。

無益の品は、たとひやすしともかふべからず。

第十二課　フランクリンの笛を買ひし話

むかし、フランクリンといふ大賢人ありけり。かつて、その幼きとき

のことを次のごとく語りつたへけり。

「余が七歳のころ、友人より、わづかの金をもらひければ、よろこびて小間物屋におもむきけるが、みちにて、ある友の、笛をふきつゝ來るを見て、この金にてこれをかひうけけり。

「余は、よろこびいさみて家にかへり、これを吹き立てけるとき、兄姉などより、笛の價を問はれ、かつこの金あれば、

他のよき品あまたをもとめ得べかりしといひてわらはれければ、自分も、つまらぬことをしてけりと思ひて、終になきいだしけり。

「余は、このときより、「笛のためにあまり多く與ふることなかれ」といふいましめをつくり、その後、無用の品をもとめんと欲するときには、つねに、このいましめを思ひ出して、その金を貯へけり。」

第十三課

勇氣

うはべのつよきものは、その中、かへりてよわきものなり。

つねのとき、このみてけんくわをする人は、力をいだすべきかんえうのときにのぞみて、にぐるものなり。

まことの勇氣あるものは、つねにおちつきて、一旦、大事あるにあたりても、少しもさわぐことなきものなり。

かろ〳〵しきうまれつきの人には、勇氣なきものなり。

眞の勇氣は、正しき道をまもりて、己の慾に克ち、不正のそしりにたゆるにあり。

わが行、正しきときは、人にわらはるゝとも、はづることなし。

もしわが行よこしまなれば、人

にはめらるゝ　とも、わが　心　に
はづるものなり。

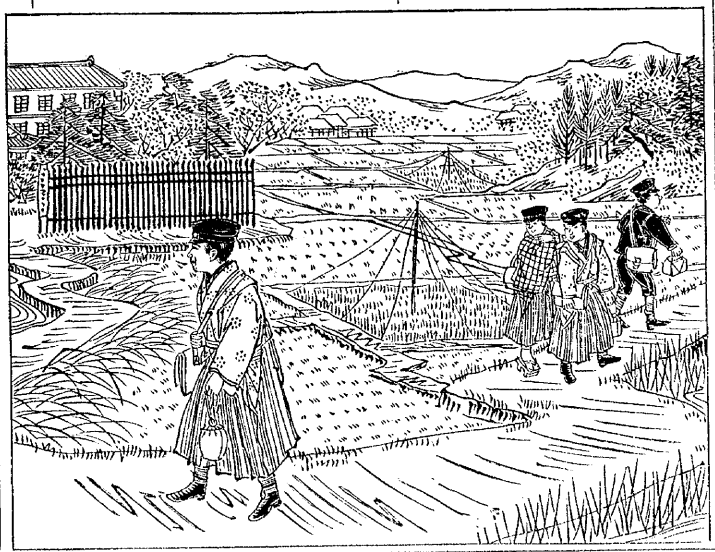
第十四課

眞勇

ある　小兒　の　話

ある　日、あまた　の　小兒、學校　に
ゆく　途中　にて、一人　の　小兒、
鳥　の　す　を　とり　に　ゆかん
と　言ひ　いだし　たりければ、一同

これ　に　したが
ひ、學校　を　ば、
やすみて、森　の
方　へ　と　おも
むきけり。
この　中　に　一人
の　小兒　あり、
これ　を　きかず



して、「われ　今朝、父母　に　學校
へ　行く　と　つげたれば、父　母
の　ゆるし　を　受けねば、君　に
したがひがたし。」と　いへり。
あまた　の　小兒　等　これ　を　きゝて、
臆病　なり　と　あざ　けりたれど、
この　小兒　は、少し　も　臆せず、
かたく　この　すゝめ　を　こばみて、

ひとり　學校　に　おもむきたり。
教師　は、人より　此　はなし　を　きゝ
て、翌日、生徒　に　向ひて、勇氣
の　こと　を　かたり、いひける　やう
「わが　務　を　をこたりて、むなしく
あそび　たる　人　と、道ならぬ
あざけり　に　臆せず、其　務　を
つくしたる　人　と、いづれ　か　勇

氣ありて、いづれか臆病なりや」と問ひければ、はゞめ人を臆病なりとあざけりしものは、皆、頭をふり、面を赤らめて、一言ともいひ得ざりしとぞ。

尋常小學國民修身篇卷二終

明治廿六年三月二十日印刷
明治廿六年三月廿三日出版

著者　赤沼金三郎　東京市本郷區元町二丁目五十番地寄留
發行者　井上蘇吉　東京市神田區錦町三丁目一番地
同　梅原龜七　大坂市東區備後町四丁目十一番地
同　井上太郎　東京市下谷區二長町三十二番地
印刷者　酒井清藏　東京市神田區表神保町五番地
印刷所　熊田宜遜　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
熊田活版所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地

版權所有